かげふみ

針とら

1

夢はなにかって？　いつか一人旅をすることだよ。別に、きみとの生活にそれほど不満があるわけじゃないけれど、やっぱりいずれは自分の足で、世界を歩き回ってみたいと思ってる。世界は広いっていうだろ？　せっかく生まれてきたんだもの。いろんな景色を見たいと思うのは当然でしょう？　そうだな。特に、北の方に行ってみたいと思ってる。

きみは特に面白くもなさそうに、「そりゃまたなんで」と呟いて、両手に鎖を握りしめたまま、膝を曲げたり伸ばしたりしてブランコを揺らした。

キィコキィコと鎖を鳴かせるきみは、自分で質問しておいたくせに、もう話に興味を失ったようで、ブランコに没頭していってしまう。

せっかく真剣に話しているのに。

きみはいつもそうやって言葉をやり取りしてる途中で、決まってどこかへ放り捨ててしまうので、まじめに話そうと思うのが、馬鹿らしくなってしまう。

「わかったよ」

ときみは肩を竦めて、

「興味深いので知りたいなあ」

と棒読みした。

それはね。北の方には、一日中暗くならない土地があるそうなんだ。夜になっても太陽が沈まない、ちょっと不思議な場所なんだって。

光が絶えないなんて、これ以上の喜びはないだろ？　そこに行って、他の奴らと、ちょっと一杯やりながら、一晩中気ままに語り合ったり、ダンスを踊ったりして暮らすんだ。

「お酒、飲むのか？」

うん。やってみたい。

「おれ飲めないぞ」

別にきみに飲んでもらわなくてもいい。一人旅の話なんだから。

「おまえだけでそんなこと、できるわけないだろ」

人の夢をバカにしてはいけないって、教わらなかった？　すぐに話を茶化すのは、きみの悪い癖だ。あまりそんな意地悪ばかり言っていると、そのうち影もいやになって家出してしまって、きみは明るいところを歩けなくなる。

きみは頭を掻いて、「わかったよ」とまた言うと、ブランコをこいで、振り子のように揺れた。

板に座ったきみの足のうらが、ブランコに合わせてゆったりと揺れる。きみの身体のなかで、いちばん気に入っているのは足のうらなんだ。たぶん、いちばんふれあっているからじゃないだろうか。きみが立っているときはいつもきみの足のうらとふれあっているから。

ブランコの一番高いところでは、遥か地平線の向こうに向けられてしまって、このときばかりはきみの足のうらも、身近な存在ではなくなってしまう。

揺れるきみの身体に合わせて動きながら、空ときみばかりを見ている。

「なんか、それは愛の言葉っぽくてやだな」きみは文句を言う。

仕方ないじゃないか。実際、きみの姿ばかり見えている。

文句を言うなら、たまには影の視界からのいてほしい。

「知らないよ。おまえがついてくるのがいけないんだろ」

仕方ないじゃないか。

「たまにはひとりで別のものを見に行ってみてもいいんじゃねえの」

またきみは意地悪を言う。きみがいなかったら、困ってしまう。

「一人旅するとか言ったじゃんか」

いつかの話だ。それに、きみに倣って言っただけだ。家を出て世界を歩くロマンを、味わってみたいんだ。影は真似をするものだから。

「別におれはロマンでここにいるわけじゃないんだけどなあ」

困ったような笑いを浮かべて、きみはブランコをこぐ。

きみの着ているカーディガンの両端には、荷札が一枚ずつ括られていて、ブランコにあわせて揺れている。荷札には宛先の名前と住所が記されている。一枚はきみのお母さんのもので、一枚はきみのお父さんのものだ。

昨日、木下さんが帰ってしまうと、お母さんはきみに荷札を括って、お父さんのマンシ

ョンへ送った。電車とバスを乗り継いで、きみがお父さんのマンションへきみを配達すると、出てきたお父さんはきみに荷札を括って、お母さんの家へ送り返した。
どこへ届ければいいんだろう？　迷ったきみは郵便局へ行って、受け取ってもらえない郵便物はどうなるのか尋ねた。受付のおじいさんは親切な人で、勉強偉いねときみの頭を撫でると、しばらくとっておいて、取りに来なかったら処分するんだよとにっこり笑った。
それできみは、きみをしばらくとっておくことにして、公園でブランコを揺らしている。
「さて、と」
きみはブランコの勢いを弱めると、ぽおんと飛び降りて地面に着地した。いつものように、きみの足の裏に吸いつくように合わさって、影も地面に着地する。いや、ずっと地面にいたわけだけれど。
きみは頭の後ろで両手を組んで、じっと遠くの方を見ている。公園は小高い丘の上にあって、すごく見晴らしがいいのだと、きみは昨日得意げに話していた。
何が見えるの？
「家がたくさん見えるぞ。ビルとかもな。あっちに電車が走ってる」

ふうん。
たくさんって、どのくらい？
「たくさんだよ。百とか、二百とか。たくさん」
影を馬鹿にするのは良くない。家はとても大きなものだから、百や二百の家を一度に見るなんてできないはずだ。
「いや、見えるよ。家も小さいんだ、この距離だったら。もうすぐ夕暮れか？」
きみは頭上を仰がずにそう問いかける。
きみと空を見上げるのは、影の役目だ。見上げるのは影で、見下ろすのはきみ。いい加減なきみだが、このルールだけはしっかり守ってくれる。
空は薄紫色に染まっていて、うん、もうすぐ夕暮れの色だ。
「だろう。暗くなってきたからな、いろんな家や店の軒先が、ピカピカ光りだしたんだ。イルミネーション。もうすぐクリスマスだから豪勢だぜ。赤や青に光って……綺麗だぜえ、すごく」
きみはにやにや笑ってそう言うと、綺麗だ綺麗だと頷いてみせる。見れない影を不機嫌

にしてやろうというきみの魂胆なのだが、そんな見え透いた手には乗ってやらない。
「今日も街に行きたいか？」
うん。もちろん。
明るいところに行きたいんだ。夜の闇に溶けたまま、眠っているなんてつまらない。街の影たちは眠らないそうだ。限りある人生、活動的にいきたいものだ。
「じゃあ行くか。ちょっと買い物に行くだけだけどな」
きみはうきうきした様子でポケットから財布を取り出し、中身を確かめている。陽が沈みきらないうちに、早く、早く。
イルミネーションというのを見てみたいんだ。
暗くならないと出てこない奴らなんて、ちょっとわかりあえなさそうだけれどね。

＊

きみは街を歩く。

カーディガンのポケットに両手を突っ込んで、吹き抜ける風に寒そうに肩をすくめながら、どこへともなく歩いてゆく。
陽はもうずいぶんと傾いていて、影はこのとおり細く、長くなる時間だ。さっきからきみに追いついては追い越し、追いついては追い越しを繰り返している。
追いかけっこみたいで面白いと思うのに、きみは興味もなさそうにマフラーに顔を埋め、自分の爪先を見下ろしたまま、目で追いかけもしてくれない。
ねえ。
「なんだよ」
ふむなよ。
「無茶言うなよ」
うっすらと暮れていく夕暮れの道を、きみは影を踏みながら歩く。きみとは逆方向から、沢山の人たちが歩いてくるが、会話に夢中で特にきみに気を留めはしない。きみの吐く息が白く浮く。
ところどころに灯った電灯と、家々の窓から漏れてくる光。軒先に置かれたもみの木に、

イルミネーションというらしい電球が巻きついて、せわしなく光っている。
確かに綺麗ではあるけれど、それほどではないかなあ。明るいものは好きなんだけど、もっと明るく光ってくれないと、影のニーズは満たせない。
ねえ、そう思わない？
「別に」
丘の上からは、もっと綺麗に見えるものなの？
「別に」
きみはぼそりと言い捨てて、ただ黙々と歩き続ける。
さっきはあんなに綺麗だ綺麗だと騒いでいたくせに、もう興味を失ってしまったようだ。きみは街に行く前はうきうきしているのに、街を歩くときはいったい何が気に入らないのか、きまって不機嫌になるので、ちょっと困ってしまう。
夕餉の支度をする包丁のとんとんというリズミカルな音が、いろんな家から聞こえてくる。テレビだろうか、ニュースキャスターが、乾燥しているから火の元に注意してくださいと伝える声が聞こえる。この頃、街では放火が何件も起こっているらしい。

いただきまーす、と元気のいい子供たちの声が聞こえて、きみは立ち止まった。
はいどうぞ、と大人の女の人の声が続いて聞こえた。いただきます、と今度は少し野太い男の人の声。
きみは顔を上げる。
そっと周囲を窺うと、その家の敷地へ忍び込む。爪先で背伸びをして、窓に顔を寄せた。よく磨きこまれた、横開きのピカピカの窓だ。きみはじっと窓の向こうを覗き込む。
なにか面白いものが見える？
「何が見えると思う？」きみは振り返りもせずに答える。
声からすると、子供が二人と、お母さんとお父さん。
みんなで晩ご飯を食べているんじゃないかな。
「はずれだ。そんなありきたりな光景じゃない」
……なにが見えるの？
「荒れ果ててるな。骸骨がたくさん転がってる。生きた人間の姿はない」
な、なんだって？

何があったんだろう？
「鬼が食卓をうろうろしてて、がじがじ食器をかじってる。きっとここに住んでる人たちは、あの鬼に食べられちゃったんだろうな」
そうなんだ。じゃあさっきの夕食時みたいな声はなんだったんだろう？
「人間を誘いこむための鬼の罠に決まってるだろう」
やばいじゃないか。逃げよう。鬼に見つからないうちに早く行こうよ。
「そうだな」
きみはもう少し窓の向こうを見つめてから、ようやく背伸びをやめて振り返った。
背を向けた途端、楽しそうな笑い声が窓の向こうで弾けたけれど、きみは知らんぷりだ。冷たくなってきた風に身体をすぼめて、また歩きだした。
きみは小さなスーパーに入ると、晩ご飯のクリームパンと、牛乳のパックを買った。財布の中には、家を出るときに棚の上の貯金箱から取り出してきたお札が入っているから、しばらくはお金に困らないだろう。
それからきみは雑貨屋を探して、アルコール式のランタンを一つと、ノートとペンを買った。
ランプは、影へのプレゼントだろうか。
「違う。サンタ用の目印だ」
サンタ？　それなに？
「じいさん。クリスマスに、なんでも子供の欲しいものをくれるらしい」
なんでも？
「なんでも」
なんでもって――なんでも？
「なんでも」
……魔法が使えるの？
「だろうな。で、おれの掴んだ情報によるとだ。サンタは、トナカイのひくソリに乗って、空からやってくるらしい」
それは格好いいね。
「で、煙突から家屋に侵入し、靴下の中にプレゼントを詰め込む」

それはどうなんだろう。その人、大丈夫なの？
「まあ昔の話だ。今は煙突じゃない家にもやってきているらしい。現代にうまく適応してるんだな」
ふうん。おじいさんなのに凄いとは思うけど。
「とはいえ、空飛ぶソリで来るのは同じようだからな。サンタが空から見てわかるように、ランプを吊るしておくんだ。灯りに誘われて寄って来たところで、捕まえる」
ふうん。なんだか虫取りみたい。
サンタってどんな人なの？
「太ってて髭面のじいさんだって。赤い服着てて、白い袋が目印」
お歳なのに派手だねえ。きみ、サンタどこで見たの？
「いや、おれは見たことない。うちにサンタが来たことはないから」
え、そうなの？
うーん、大丈夫？　ガセネタじゃない？　ちょっと話が出来過ぎているような気がするよ。ディテールがしっかりしてるぶん、逆になんか怪しい気がする。

「ガセネタじゃないよ。疑り深い影だな。みんなが言ってることだ。どうやら余所のうちには毎年来てたようなんだ。それでおれも去年、うちにも来てくださいって、手紙を出してみたんだけど」
来たの？
「来なかった」
ほらやっぱり。ガセネタだ。
それかその人、実はやな奴なんじゃない？　きみをのけものにして。
「まあそう言うなよ。短気な影だな。どうもサンタが動けるのは、クリスマスイブの晩しかないようなんだ。現実的に考えて、全部の家をまわるほど時間がとれないんだろう。そこをどうこう言っても仕方ないさ」
ふうん。きみは偉いね。考え方が大人だ。
「でも今年は欲しいものがあるから、確実に来てもらいたいんだ。だからうまいこと、誘い出さなきゃいけない。目印があった方がわかりやすいだろ？」
なるほど、それで目立つようにランプを買ったってわけだね。サンタがどうかは知らな

いけれど、影はみんな灯りに惹かれるものだから、サンタの影が寄ってくるかもしれない。
でも、ランプの灯りくらいで大丈夫かな？
「もっと明るくした方がいいかもな」
きみは商店街の道を歩きながら、店先に巡らされたイルミネーションを見上げる。たくさんの小さな光の粒が、星の形やベルの形をつくって、赤、青、紫、黄色にピンク。代わる代わるにぴかぴか光っている。
「ちょっと、持っていこうか」
きみはきょろきょろと周りを窺うと、商店通りを脇道に折れた。二つも通りを抜けるとお店はなくなって、代わりに三角屋根が軒を連ねている。すっかり陽は落ち、常夜灯のぼんやりとした灯りが照らしているばかりで、ちょっと眠くなる。ふわあ。
きみは首を巡らせながら歩くと、玄関先に出されたもみの木に目をつける。きょろきょろとあたりを見回して、巻き付いたイルミネーションに手を伸ばす。
イルミネーションのコードは、もみの木の上の方で引っ掛かってしまっているみたい。きみは背伸びしたりジャンプしたりして外そうとするけど、うまくいかない。イルミネーションの電球たちはきみの奮闘を優雅に見下ろし、ぴかぴかぴかぴか。ふわあ。
笑い声が聞こえて、きみは手を止めた。
小さな子供の笑い声だ。わずかに開いた窓の向こうから聞こえる。男の人の笑い声も混じった。ばしゃばしゃばしゃと、水の音。
きみはもみの木との格闘をやめると、そっと敷地の門をひらいた。アプローチを抜けると、壁伝いに忍び寄り、開いた隙間から真っ白い湯気が出ていくその窓を、ぐいと背伸びして覗き込んだ。
今度は、何が見えるの？
「なんだと思う？」きみは謎掛け遊びが好きだ。
ふふん。今度は自信があるよ。
ずばり、小さな男の子と、お父さんだ。水の音から察するに、お風呂で二人で遊んでいるんだ。
どうだ、名推理でしょう？
「はずれ」

え？　ほんと？
じゃあ何が見えるの？
「海」
な、なんだって。海？
「うん」
まてまて。だまされないぞ。影をからかうのは良くない。だって、家の中に海はないはずだよ。
「なんだよ。知らないのか。小さい海なら、家の中に湧くこともあるんだぜ」
え？　ほんとう？
「ああ。家海っていうんだ。そう珍しいものでもないよ」
そうなんだ。そっか。それで、水の音がしたのか。
じゃあ、さっきの笑い声はなんだったんだろう。
「海なんだから、笑いザカナの声に決まってるだろう。人間そっくりの声で笑うヘンなサカナだ」

へええ。面白いサカナもいたもんだねえ。そのサカナ、綺麗？
「全然」
窓の向こうでは二匹の笑いザカナが、ばしゃばしゃ水の音と一緒に、楽しそうに笑い声をあげている。いつか一人旅するときは、是非とも釣りに行ってみたいものだ。
きみはくるりと窓に背を向けると、また壁伝いに門へ戻った。
アプローチを二段下りたところで、はっと息を呑んだ。
誰かいる。
電柱の陰に、ぼさぼさ頭の男の人が、オレンジ色の光に照らされて、闇にぼうっと浮き上がってきみを見ていた。
右手に丸めた新聞紙を掴んでいて、その先端でオレンジ色の炎が燃えさかっている。コンクリートの地面に、男の人の影や、門の影、もみの木の影が立って、炎の動きにあわせてゆらゆら楽しそうに踊っている。足下には、小さな赤いポリタンクケース。
きみがぽかんとしていると、男の人は気付いた様子で新聞紙を地面に落とした。靴先で炎をもみ消した。炎が消えると影たちも静まって、薄暗い常夜灯に照らされた地味な影に

なってしまう。
歩いてくると、もみの木に手を伸ばし、イルミネーションのコードをくるくると器用に外した。丸めてきみに差し出した。まだぽかんとしたきみの手に押し込んだ。
「誰？　何してたの？」
きみが訊いても、男の人は黙っている。
「火を」きみは、地面に落ちて燻っている新聞紙の残骸を見下ろす。「つけるつもりだったの？」
男の人はコートのポッケに手を突っ込むと、ごそごそと中を探る。取り出した手に握られているのは、小さなマッチ箱だ。
きみの頭の上にちょこんと乗せた。それからポリタンクを持ち上げ、よいしょときみの足下に置いた。
手袋を嵌めた手をひらひらと二度振って背を向けると、そのまま行ってしまった。
すっかり見えなくなると、きみは強張らせていた肩を落とした。「……なんだったんだ」
誰だろうね。

知り合いじゃないの？
「いいや？」きみは首をかしげる。「全然知らないよ。ニュースで言ってた、放火魔じゃないかな。新聞、燃やしてたし」
なんか、いろいろくれたね。
「うん。良かった。ちょうど欲しかったんだマッチ。せっかくランプ買ったのに、火ぃつけるもの忘れてた。あとこれ、アルコールかな」
あ、燃やすの？
「ん？　何を？」
家。
明るくなるよ。
きみは、ぱちぱちと瞬きをした。それから、カップに沈んだ溶けない砂糖をスプーンでかき混ぜるみたいに、ゆっくりと二度視線をぐるぐる回した。
それから、よく意味がわからないというように、首を捻った。「ううん？」
燃やさないの？

「なにを？」
だから、家だってば。
「なんで？」
明るくなるよ。
さっきの影たち、生き生きしてて、とても楽しそうだったじゃない。ああいうの、いいよ。
すぐできるよ。マッチとアルコールがあれば、燃やせるよ。
「そうだけど」
燃やす？
「家？」
うん。
「燃やしたいのか？」
いいんじゃないかな。
きみはどうなの？

「え？」
はっきりしてよ。
「どうして燃やしたい？」
だって、明るくなるよ。
「そうか」
うん。
ばしゃばしゃばしゃと水の音と一緒に、笑いザカナの声が聞こえている。それはきっと、とても巨大な、ぎょろりとした目玉となめらかな鱗を持ったサカナで、小さな牙の生え揃った口をぽかりと開けて、ママ、パパ、と笑うのだろう。
カーディガンの両端に括りつけられた荷札が揺れるのを、きみはじっと見ている。
「そろそろ、帰るぞ」
うん。
丘の上には公園と、休憩のためのお手洗いが建っている。お手洗いは丸太でできたログハウスみたいな建物で、電気はきちんと通っているし、定期的に掃除もされているのか綺

麗だ。
きみはお手洗いの電気をつけると、流し場の脇にポリタンクをよいせと置いた。奥から二番目の個室に入ると、口を閉めた便座の上に座り込み、鍵をかけた。クリームパンを半分と牛乳を半分おなかに収めたあとは、しばらくランタンを満足そうに眺めていたけれど、やがてノートを開いて膝のうえに置き、せっせと書き込みはじめた。
何書いてるの？
「文字の練習だ。サンタへの手紙、ちゃんと書けるようにしとかないと」
きみはしばらく書き取りをしてから、眠ることにした。奥の掃除用具入れに仕舞っておいた毛の禿げた毛布は、裏のキャンプ場のゴミ捨て場から拾ってきたものだ。
きみは便座の上で膝を抱えて丸くなると、毛布にくるまった。
おやすみ。
「おやすみ」
きみは言って、動かなくなる。きみは眠るとき電気を消さない。暗闇が怖いのだという。溶けて消えてしまうわけでもないのに、どうして暗闇が怖いのだろう。

きみは眠っている。きみはいつもくるんと小さく自分の身体を丸めて、一切動くことなく、静かに静かに眠る。あんまり静かに眠るものだから、きみが生きてるだろうか、ちょっと心配になってしまう。
ねえ。
生きてる？
呼びかけてみるけれど、きみはやはりとても静かだ。きみの寝顔を確かめたいけれど、電灯が真上にあるものだから、眠るきみの表情は見えない。

2

だん、だん、だだん。
きみは影を虐待する。
足を振り上げては、勢い良く振り下ろして。
いたい、いたいよ！

「え、本当か？」きみは足を止めて、ちょっと不安そうに顔を曇らせて地面を覗き込む。
いいや、冗談だよ？
痛いわけないじゃないか。影だもの。きみ踏んでるの、足の裏だし。
「てめっ」
きみはまた足を振り上げ、ぼろぼろの靴で影を踏み付ける。いたい、いたいよ！
爽やかな朝の陽射しが差し込んで、丘の上に影たちを濃く描き出している。冬の朝の空気は冷たく澄んでいて、身体を動かすきみの口から吐き出される息は白い。だん、だん、だだん。踏み付けるたびに、きみの足の裏と影の足の裏が、勢い良く触れ合う。
だん、だん、だだん。
いたいよ！　やめてよ！
「ほんとに大丈夫か」きみはまた不安そうにこちらを覗き込む。
だから冗談だって言ってるのに、もう。
いつも言ってるでしょう？　ごっこ遊びは真剣に。せっかく迫真の演技なのに。いちいちそんな心配してたら、面白くないじゃないか。

「だってさー」
きみは時々、こうして影を踏んだり蹴ったりする。せっかくきみが遊んでくれるから付き合うけれど、正直あんまり楽しくはない。でもきみは他の遊びを知らないようなので、仕方ない。
一緒にラジオ体操を済ませて、残りのクリームパンと牛乳をおなかに収めると、きみは街へ降りる。
今日はどうするの？
「……」
何して遊ぶの？
「……」
きみは答えない。街に来るときみは例によってむっつりしている。
通りに沿って立ち並んだ家々の窓から、いろんな音が飛び交ってアーチをつくっている。その下を、きみはカーディガンのポッケに両手を突っ込んで歩く。
テレビのアナウンサーのお姉さんが、天気予報を喋る声。干した布団を布団たたきでぱ

たぱたと、リズミカルに叩く音。湯気を立てる薬缶が吹く、ぴゅうって高い笛の音色。ごはんよ、って優しい声。笑いザカナの声。

きみは足を止めた。

しばらく黙って、自分と影の爪先の境目あたりを見下ろしていたけれど、やがて小さく、影にだけ聞こえるように、

「やっぱり、燃やしちゃおうか。家」

ポッケに突っ込んだ右手を揺らした。沢山のマッチ棒を抱いた小箱が、かしゃこかしゃこと陽気な音を立てる。

いいね。

でも夜がいいよ。

夜に燃えると、綺麗だよ。明るくなって、キャンプファイヤーみたいで。影たちが寄ってくるよ。

「サンタの影も、寄ってくるかな」

うん。影はみんな明るいのが好きだもの。ランプやイルミネーションよりも、ずっといいよ。

「なるほど」

きみはそれでもちょっと考えこむようにしている。「どうかな」

せっかくだから、うんと明るくなるようにしようよ。夜なのにまるで昼間みたいに、炎を大きく燃やして照らしてさ。みんなで仲良く踊るんだ。

なるべく大きな家を使わなきゃだよね。

それか、いっそ、街ごと燃やしてしまう？　それならサンタも絶対気付くよ。

「気付いても、それじゃ何処に降りていいかわからないだろ」

そうかあ。……そうだね。

じゃあ、やっぱりきちんと選ばなきゃだね。

「あそこなんか、いいかもな」

きみは人喰い鬼が棲みついた家の敷地へ入っていく。この前も覗いたぴかぴかの窓へ近づいて、背伸びして中を覗き込む。

今日も鬼たちは楽しげに笑って食事をする音を立てている。美味しい、とか、ママのつ

くる料理は世界一だ――そんな言葉を次々に発して、誘き出された哀れな犠牲者を待ち受けている。きみがみつかって食べられてしまわないか、どきどきしてしまう。

鬼たちの様子はどう？

「相変わらずだ」きみは無表情で答える。

美味しい美味しいって言っているのは、やっぱりあれ？　人間のお肉のこと？

「……ああ。犠牲者が骨つき肉になって貪り喰われている。がつがつと食べながら、鬼たちは笑っているな」

なんて痛ましい。

あまり見ちゃいけないよ。そういうの、教育に良くないよ。

ここ、燃やしてしまう？　なかなかの大きさだし、鬼を退治できて、一石二鳥だ。

「いいかもな」

あら？　と、影たちの笑い声の合間に、女の人の声がした。

ぱたぱたとスリッパの音が近づいてきた。

やばい、みつかったよ。

逃げて。捕まって食べられてしまうよ。

きみは声に驚いてしまったみたいで、動けずその場に立ち尽くしている。がらりと窓が横に滑った。

顔を出したのは、人間のおばさんだ。

窓の向こうから、きみを見下ろした。それから周りを見回すと、ちょっと困ったようにきみに笑いかけた。

「どうしたの？　お母さんは？」

きみは首を振った。おばさんはちょっと首を傾げて、困ったような微笑みを浮かべてきみを見ている。

おおい、どうしたんだ？　と窓の向こうから野太い鬼の声。おばさんは首だけ振り向くと、なんでもないわよと答えた。

それからまたきみを見やると、ちょっと待っててねと笑って、パタパタと奥へ引っ込んだ。

「はいどうぞ」

戻ってきたおばさんは、きみの手に蜜柑を一つ握らせて、にっこり笑った。
「おなか空いてるんでしょう、ぼく。早くおうちにお帰りなさい。お母さんが食事の支度して待ってるわよ」
手の中の蜜柑を見下ろして、きみはこくりと頷いた。
くるりと背中を向けて、歩き出した。背中でがらりと窓が閉まる音がした。
きみは手の中で蜜柑をころころと弄びながら、また道を歩く。
ふう。良かった。
きみが食べられてしまうかと思った。
危なかったね。
今のは、人間だよね？
「みたいだな」
蜜柑をボールみたいに投げてはキャッチし、きみは特に興味なさそうに頷く。
「鬼に捕まってる人質じゃないか？」
優しそうな人だったし、蜜柑貰ったし、助けてあげたいところだけど、やっぱり、難しいかな。
「鬼に喰われたくはないな」
あそこにする？　燃やすの。
「さて、どうかな。いろいろ見て回ってから決めよう」
今度は空色の屋根のおうち。大きな庭にまん丸の木のテーブルやロッキングチェアが置かれている。お庭に面して、外開きの張出し窓がある。下枠がきみの胸の高さくらいの、長方形の大きな窓だ。
きみはぶらぶらと歩いていって、窓の向こうを覗き込んだ。それから、あ、と口を開けると、くるりと背中を向けて走りだそうとして、足をもつれさせて転んでしまった。きみのドジ！　今度こそ鬼に捕まってしまうよ！
窓の掛けがねを乱暴に外す音がした。ガタンと勢い良く外へ開いた。
窓から顔を出したのは、今度は女の子だった。
「あなた誰？　ここ、うちの庭なんだけど」
女の子は不審そうに眉をひそめて、倒れたきみを見下ろした。

「不法侵入よ。法律違反よ。警察に捕まっちゃうわよ。牢屋で一生過ごすことになるわよ」
次々とよくわからないけど恐ろしげな言葉を並べる。目が冷たい。声も冷たい。氷の女王みたい。
芝生の上に尻をつけたまま、きみはおろおろと門の方を見やっている。どうも、逃げようにも足を捻っちゃったみたいなんだ。
「あなた、どこの子なの？　ママは？　どこの学校？」
まくしたてる女の子に構わず、きみは口を引き結んで影とにらめっこ中。きみは影相手には偉そうにしているくせに、女の子相手には話せやしないんだ。
「答えなさいってば。うちの庭で何してたのよ」
「かげふみ」
きみは左脚で、たんたん、と影を踏む。いたいですよ。
女の子はぱちぱちと二度瞬きした。
それから、そう、と納得したように頷いて、ふうと一つ大きなため息をついた。「いいなあ、外で遊べて」

きみはようやく顔を上げて女の子を見た。
窓枠に頬杖ついて収まった女の子は、一枚のキャンバスに描かれた絵画みたいだ。きみより二つ三つ年上だろうか。肩までの栗色のさらさらな髪をしてる。
女の子と目があい、きみはまた下を向いた。影の頬は赤くならない。
「ちょっと待ってて」
女の子は言い置くと、窓の向こうへ引っ込んだ。がたんがたんと抽斗を開け閉てする音。何やってるの、と苛立たしそうな、女の人の声がする。
ややあって戻ってきた女の子の手には、バンドエイドが一枚握られていた。薄いピンク色で花柄の模様がついている。
押し付けるように窓越しに差し出されたバンドエイドを受け取ると、きみはちょっと迷ってから、右脚の足首にぺたりと貼った。
効く？
きみはすっくと立ち上がって、窓際へ歩み寄った。効いたみたい。
開いた窓の向こう、女の子のもっと後ろからは、なにやら声の応酬が聞こえてくる。さ

っきの女の人の声と、別の男の人の声。どうも、何か言い争っているみたいだ。
「トランプでもしない？」
女の子は首だけ振り返って奥のほうを見やると、うんざりした様子で吐息をついた。きみに向き直って、器用に肩を竦めてみせた。ちょっと大人びた仕草だ。
「私、身体弱くて。外で遊んじゃいけないの。だからママとパパがあんな感じのときでも、逃げ場がないのよねえ。気が散ってお気に入りの本も読めやしない」
自分が吐き出す言葉の切れ端が、もくもくと煙になって漂ってきているみたいに顔をしかめた。
「ちょっと付き合ってよ。どうせ暇でしょ？」
また引っ込んで、がたんがたんと抽斗を開け閉てする。何やってるの、とまた苛立たしそうな女の人の声。ややあって息せき切って走ってきた女の子は、トランプケースと、小脇にキャンディの入った袋を抱えていた。
それできみは、女の子とババ抜きをはじめることにする。
「もう一つ、息の合わない人たちなのよねえ。私のママとパパって」

女の子は窓枠に頬杖をついて、きみの掲げたカードに手をやった。
きみはころころと口の中でレモンキャンディを舐めながら、真剣な表情でカードをみつめている。
「二人とも悪い人ではないんだけどさ。方向性の違いっていうのかしらね。一生懸命すぎて、空回っちゃうタイプなのよねえ。大人って、そういうのあるじゃない？」
きみの手札から一枚引くと、ふふふと笑って、手持ちの一枚と一緒にカード入れに収める。
「あなたのママとパパはどう？　仲いい？」
きみが頷くので、影も頷いておく。
「羨ましいなあ。やっぱり、サンタにお願いしようかな」
「……なにを？」
「ママとパパがもうちょっと、仲良くしてくれるように」
きみは目を瞬いた。
それから、それがとても重要な確認事項であるかのように、女の子の目をじっと覗き込

んで訊いた。
「サンタのこと、詳しい？」
「詳しいってほどじゃないけど」
「靴下に入らないものでも、貰える？」
「それはうん。大丈夫よ」
「ほんとう？」
「うん。だって私、去年のクリスマスにサンタに頼んだもの。遊園地に遊びに行きたいんですって。しばらくパパの仕事が忙しくて、ちっとも出掛けられなかったから。そしたらね。サンタ、チケットの手配はもちろん、当日のパパの仕事の都合までしっかりつけてくれたもの。サンタが代わりに仕事済ませてくれたんだって、パパにこにこしてたわ」
わあ。サンタ、サービスするなあ。
「私の身体の調子も、なんだかその日は良かったしね。全部、叶えてくれたわけよ。まさかそこまでできるなんて、正直、サンタの力を侮ってた。やり手よ。凄腕よ、サンタは」
凄いんだなあ、サンタ。きみが会いたいというのもわかる。

きみは身を乗り出して真剣に話を聞きながら、深く頷いた。がぜん、やる気が湧いてきたみたいだ。
「だから今年はママとパパのこと、ちょっとお願いしてみようかなと思って。本当はお人形が欲しかったんだけど、ま、来年までお預けかなあ」
「やっぱり、サンタ、毎年来るの？」
「当たり前じゃない。子供のところには毎年くるわ。何言ってるの」
「ぼくんとこ、来たことないから」
「なんですって？」
女の子は信じられない、と目を見開いて首を振った。
「……一度も？」
「うん」
「手紙、ちゃんと書いてる？」
「うん」
「返事は？」

きみは首を振る。
「ちょっと、どういうこと？　あなた、ひょっとしてワルなの？　悪い子のところには来ないのよ？」
きみは慌てた様子でぶんぶん首を振り、それからちょっと不安そうに顔を曇らせる。自分ではそこそこ良い子のつもりなのだが、努力が足りないかもしれないと述べた。
「字、汚かったからかもと思って、練習してる。これから頑張る。手紙もまた書く」
「じゃあ、ときどきいらっしゃいよ。サンタへの手紙、添削してあげるから」
えへんと腕を組む女の子に、きみは首を傾げた。
「サンタも、世界中の子供から手紙がくるんだもの。あなたの手紙、埋もれて取り零されちゃってるのよ。サンタが来たくてたまらなくなるようなもの、書きましょ。協力してあげる」
やったね。頼もしい先生ができた。
字の練習と、文章の添削。あとは大きな炎を燃やせば、今年こそきみのところにもサンタがやってきてくれるはずだ。

「で、あなたの欲しいものはなんなの？」
帰り際、トランプを片付けながら女の子が訊いた。
ババ抜きは結局きみの連敗で終わってしまった。二人で皮を剥いて分けあって食べた蜜柑は、甘酸っぱくて美味しかっただろうか。
「どうせママやパパにはナイショなものなんでしょう？　何狙ってるの？　教えなさいよ」
悪戯げににやりと笑う女の子に、きみもにやりと笑って答えた。
「秘密だよ」

それからきみは毎日、女の子の窓のもとへ向かうことにする。街へ降りると、家々の窓を巡ったあと、最後に決まってその大きな窓を覗き込む。
女の子はいつも窓際で、外を眺めたり本を読んだりして過ごしていた。今読んでいるのはロミオとジュリエットというお話で、女の子はそのお話をとても気に入っているらしい。
「おおロミオ。あなたはどうしてロミオなの？」
きみが行くと、窓を開けて、本を片手にそう朗読してみせる。

きみはちょっと不思議そうに首を傾げて、
「ぼくはロミオじゃないけど、どうしてぼくがロミオなの？」
「そんなの知らないわよ」
女の子は肩を竦める。わりと無責任だ。
「さあ、書き取りはしてきた？」
広げたノートを見やると、女の子があちゃあ、と頭を抱えてしまうので、きみはしょんぼりしてしまう。
真っ白なノートにはぎっしりと、きみが練習した文字たちが書き連ねられている。はじめて地球にやってきた軟体動物が懸命にのたくって力尽きて死んでしまったような文字ね、と女の子は評した。ちょっとわからない。
「読めないとどうしようもないから練習してね。で、調べたんだけど、手紙の冒頭は〝拝啓〟で終わりは〝敬具〟って書くのが正式な書き方みたい。でも子供があまりきっちり作法を守って書いてたら逆に生意気に見られるから注意が必要ね。無難に〝こんにちは〟でいいと思う」

女の子は『正しい手紙の書き方』という本を手に、アレンジを絡めながらきみに文章を指導する。
「そのあと、軽く自己紹介。ここでいかに個性を出して、サンタの目を惹くかが勝負だと思う。自分がいったいどういう子供なのか、わかりやすく、印象的にね。プレゼントを届けてもらうんだから、何処に住んでるのかも必要ね」
きみはむうと唸り、窓柵の上に広げたノートに、自己紹介を書き付ける。真剣極まりない表情だ。
女の子はきみの書いた文面を覗き込み、違うでしょ、とくすくす笑った。
「住んでるとこ。住所を書くのよ」
きみはノートにペン先を落としたまま、首を傾げて女の子を見やる。
「だから、公園のトイレは住んでるとこじゃないでしょ。あなた、おうちは？」
「丘の上」
「あっちに家なんてあったっけ？　なんもないイメージだったけど。番地とか、わからない？　まあ、いいわ。じゃあ次。あなたがどんな子なのか。目を惹くような、ちょっと個

性的なこと書きましょう」
きみは首を捻って考えこむ。個性的。これはなかなか難しい問題だ。影は手紙を書いたことがないので、ちょっとアドバイスできない。
「難しく考えなくてもいいの。毎日、どんな風に過ごしてるかとか、ママやパパや友達とどんなことして遊ぶのかとか。そんなことでいいのよ」
きみはちょっと迷ってから、ノートに書き付ける。
女の子はノートを覗き込むと、またくすくす笑った。
「それは個性的かも。でも、そうね。そういうときは、ぼくの人生はふんだりけったりです、って書くのよ」
きみはまた首を傾げて女の子を見やる。
「けったりされています、じゃ意味がとおらないでしょ。ちょっとシニカルで私は好きだけど、大人ウケはどうかなあ。個性的でありつつ、子供としての一般性を失ってはいけない。うーん、難しいわねえ」
女の子はきみの書く文章に、腕を組んで真剣に考え込む。きみはペン先を見やって、さかんに首を捻るばかりで、一向に先に進まない。どうも、きみには文才がないみたいなんだ。
ま、気長にやりましょと女の子は笑い、また明日ね、ときみたちは別れる。
きみは毎日、一生懸命にノートにペンを走らせている。女の子と別れたあとも、トイレの個室にこもって字の練習を続ける。
真っ白だったきみのノートは、次々にきみの文字で埋まっていって、いつの間にか真ん中のページを過ぎた。影には字が読めないので、きみの字がきちんと上手くなっているのかはわからないし、きみが何を頼むつもりなのかもわからないけれど。そんなに頑張っていったい何が欲しいのか訊いても、きみは悪戯げににしし と笑うばかりだ。
その日、女の子とトランプを終えて、鼻歌を歌いながらきみが帰ると、お手洗いの前に見慣れた影が立っていた。
夕暮れ時だ。真っ赤な光に照らされて、影は細長く、針のように鋭くなって地面に伸びている。腕を組み、きみを見やりながら、コツコツと苛立たしげに靴のかかとを地面に打

ち付ける。
「何してんだよこんなところで」
影が口を動かした。針のような影は、声も針みたいなんだ。
きみは下を向いて、その影が口をぱくぱくと動かすのをじっと見つめている。
「あいつの家にいるのかと思ってたら、送り返したって言うからさ。それならそれで戻ってくればいいだろうに、貯金箱から金とって家出とか、どんだけだよ。こんなところ、木下のババアに見つかったらどうすんだよ。誰かに会った？　こんなとこ見られたりしてないだろうね？」
次々と湧いてあふれる言葉に、きみは神の言葉をいただく敬虔な預言者のように、黙って耳をかたむけている。
影はきみに近づいて、頭に手を伸ばした。
「なんとか言えや」
ぱん、と乾いた音がして、きみの影の頭を力いっぱい叩いた。
きみは倒れて地面に尻をつけたまま、おかあさんと笑った。

3

きみは、家へ帰っていく。
丘の上の公園から、お母さんの何歩か後ろをついて、きみは歩く。夕焼けが、お母さんの影ときみの影を、長く引き伸ばして地面に描く。影たちはきみときみのお母さんの横を、追いついては追い越し、追いついては追い越し。
きみはお母さんの手に掴まりたくて、ちょっと足を速める。するとお母さんも、ちょっと足を速める。きみがもうちょっと足を速めると、お母さんももうちょっと足を速める。きみは早足になって、お母さんも早足になって、影たちはもっと早足になって、みんなで駆けっこになる。
「なんだよ。どっか行っちまえば良かったのに」
息を荒らげて家に帰ると、リビングでは男の人が寝転がってテレビを見ていた。銀色にメッシュをいれた髪に、耳には輪っかがいくつもぶら下がっている。畳に肘をついたまま、

きみを見上げて舌打ちした。
「おい、旦那のところにやったんじゃなかったのかよ？」
「そっちが引き取る約束だ、ってさ」
「ああ？」
「別れるとき勢いで、つい言っちゃったんだよ。だってなんかムカつくじゃん。向こうに渡すのも。これでもあたしの子供だし。可愛いところあるしさ」
「あのババアが来たらどうするつもりだよ」
男の人は舌打ちすると身を起こした。あぐらをかいてお母さんを見上げた。
「疑われてんだろ？　やばいだろうがよ」
「お風呂入れて、着替えさせちゃおう。この頃、姿見かけないって、しつこいんだよあいつ。一度きちんと話させた方が、しつこく言われない」
「駄目だろ。なんか告げ口でもしたら、どうすんだよ」
「大丈夫だよ。なんも言わないって。――大丈夫だよね？　ちゃんと受け答え、できるよね？」

お母さんは屈み込んできみの顔を覗き込み、ね？　と確認する。きみは頷く。
「駄目だよ。今からでも旦那のところ、置いてこいよ」
「どうせ引き取ってくれないよ。それでまた一人で外歩いてて、誰かに見つかってみなよ。よっぽど困るじゃん」
「なんとかしろよ」
「無理だって言ってんじゃん。あっちにも女いるし、絶対無理。ねえ、ちょっと、お風呂にいれてよ。着替え探すから」
「自分でやれよ」
チャイムが鳴った。
二人は演技中にカットがかかった役者みたいに、ぴたっと会話を止めて顔を見合わせた。
息をひそめていると、またチャイム。
すみませーん、木下ですけどー。声が聞こえてくる。
男の人が舌打ちした。「あのババア暇なのかよ」
お母さんは、さっときみの髪を手で整える。キッチンのタオルを濡らして搾ると、きみ

の顔をごしごしとこすった。きみは気をつけして立ったまま、仔猫みたいにごしごしされている。
ぱん、ぱんときみのシャツの皺を伸ばすと、お母さんはきみを見て頷きかける。
「ちゃんとやれるよね？」
「駄目だ！」男の人が立ち上がり、ドアの前に立ち塞がる。「いい加減にしろ。出すな」
「大丈夫だってば。悪いこと言わないよ」
「おいふざけんなよ。無理だ、ガキだろ」
「あんたよりは賢いわよ」
「おまえ、ひょっとして」
男の人の眼窩の奥で、目玉がぎょろぎょろ別の生き物みたいに動く。
「ガキと組んで、俺のこと、嵌めるつもりじゃねえだろうな？」
「なんでそうなるんだよ」お母さんは苛立たしげに首を振った。「一度きちんとやっておいた方がいいって言ってんだろ。全部おまえのせいだろうが」
「おい。いいか？　わかってるか。何かあったら、おまえだって同罪なんだからな。おれだけじゃねえぞ。おまえ止めなかったんだからな。わかってんだろうな！」
「うっせえなあ怒鳴るんじゃねえよクソが！　なんとかするから黙ってろクズ！　ババアにびびってんじゃねえ！」
またチャイムが鳴った。ガチャガチャガチャと、玄関ドアの取っ手がせわしなく揺れる。調子っぱずれに明るい声で、すみませーん。木下ですけどー。息子さんはお帰りですかー？
お母さんは男の人を乱暴にどかせると、きみの手をとって玄関口へ連れていく。脇を通るとき男の人が何か言ったけれど、お母さんと手をつないだきみは無敵だ。
「いつもすみませーん。木下ですー。あらっ。久しぶりね～」
木下さんはきみを見やると、大仰に嬉しそうな声をあげて全身で笑った。ドアを開けたときちょっと身体を引っ込めたのは、耳を澄ましていたからだろうか。
木下さんは太った中年のおばさんだ。まあるい顔に、にこにことした笑いじわが、くっきりと目元に刻まれている。以前来たとき、民生委員というお仕事をしていると言っていたけれど、それがどんなお仕事なのかは、ちょっとわからない。木下さんが来るとお母さんが不機嫌になってしまうので、きみは木下さんがあまり好きじゃない。

きみはお母さんとおててを繋いで、玄関口へ立っている。木下さんは膝を曲げて屈み込むと、きみの顔を覗き込んでにっこり笑った。
「良かった、何日か見なかったから心配してたのよ。おばさん、ぼくのこと大好きだから。元気だった？　何処行ってたのかな？」
「前のパパのところよね」
お母さんはきみの隣に立って、きみの髪を優しく撫でてくれる。
「へえ。そうなんだ」
と木下さんはにっこり頷いて、
「パパのところに行っていたの？」
ときみに問いかける。
「前のパパ寂しいって言うからね」
とお母さんは言って、木下さんはそうなんだと頷きながら、
「パパ寂しそうだった？」
ときみに問いかける。

木下さんとお母さんときみの会話は、いつも少し、へんだ。木下さんがきみに訊いて、お母さんがきみの代わりに答えて、また木下さんがきみに訊くくり返し。へんてこな伝言ゲームみたいなこの会話のやり方が、きみにはちょっとわからないみたい。
「パパのところ、行ってたの？」にこにこした顔の中で、木下さんの眼球は、じっときみの目を見たまま動かない。
きみは困ってしまう。嘘をつくような子のところには、きっとサンタが来てくれないだろう。
きみは一つ頷いて答えた。「行ったよ」うん。嘘じゃない。保証する。パパのところには行ったもの。すぐに送り返されてしまっただけで。
「楽しかった？」と木下さん。
「いっぱい遊んでもらったんだよね～？」とお母さん。
「パパに遊んでもらったの？　どんな遊び？」木下さん。きみは頷く。「どんな遊び？」
きみは首を傾げる。
「かげふみしたよ」

楽しそうじゃん、とお母さんが笑う。ああそうなんだ、と木下さんが笑う。きみもちょっと口の端をあげて笑う。みんなどこかの世界の誰かが笑っているのを、一生懸命に真似っこしてる影たちみたいに。
「影踏み、楽しかった？」
「うん」
「お母さんとは、影踏みする？」
「しないよ」
「新しいパパ、家にいるよね？」
「うん」
「新しいパパとは、影踏みする？」
「ときどき」
「よく遊んだりする？」
「ときどき」
「この頃はもう、遊んでて怪我とかしない？」

「ときどき」
「前は、おめめの周り、怪我しちゃってたよね？」
「うん」
「あれは、どうしてだったっけ？」
「転んだからって、答えたと思う」
「ああ、そうだったよね。ごめんね、おばさん忘れっぽくて。――あら。何持ってるの？」
木下さんは気付いた様子で、きみのシャツをじっと見やった。左の腰のところが、ちょっと出っ張っているんだ。
きみは首を傾げると、シャツの裾に手をかけた。お母さんがきみの頭を撫でる指先が、一瞬、止まった。きみはちょっとだけシャツをめくると、ズボンの裾に挟んだノートを取り出し、またシャツを下げた。
「手紙、書いてる」
きみは得意げに胸を張った。
「サンタに」

――なんだ、そんなもの信じてんだ。
隣でお母さんが呟いた。
「あら、そうなの。そうね。もうクリスマスだもんね」
にっこり笑う木下さんの視線は、じっとノートに向けられている。
「どんなこと書いてるの？　おばさんにも、ちょっと見せてくれないかな？」
きみは木下さんにノートを差し出した。木下さんは一ページ目からぱらぱらとめくりはじめた。何ページ目かいったあたりで、ちょっと身体の向きを変えた。
またお母さんの手が止まった。家の中、廊下の向こうで男の人が、目をぎょろぎょろさせてこちらを見ている。木下さんはじっと食い入るようにノートを見ている。ノートを見ている木下さんを、きみは見ている。
木下さんは息を吸い込むと、ノートを広げてきみに差し出した。
「これ、なんて書いたの？」
脇からお母さんがノートを覗き込む。木下さんは構わず、ノートのページときみの顔を交互に見やった。

きみはちょっとがっかりしたように頭を垂れた。「読めない？」
「ところどころ読めるんだけど。あのね。前にも言ったけど、おばさんは子供のいる家を回ってね。みんなが家でどんなことをしてるのかな、誰かに伝えたいことないかなって、調べるのがお仕事なの。ねえ、これ、なんて書いたの？」
「ぼくの人生はふんだりけったりです」
きみは女の子がしていたように、器用に肩を竦めてみせる。
「って書いたの」
木下さんは目を瞬いた。
お母さんが、ぷっ、と吹き出した。なにそれ、どこで覚えたのそんな言葉、と言いながら、くつくつと笑っている。きみは照れたように頬をかく。
「でも、やっぱり別のこと書く。ママやパパのこととか、友達のこと」
「なにか、他に書きたいこと、あるんじゃない？」
木下さんはきみの空いた手をぎゅっと包みこむ。きみは首を振る。
「ないよ」

「誰かに伝えたいこと、ない？」
「ないよ」
「……サンタには、何を頼むの？」
「秘密。だって、すごいものだから」
きみは悪戯げににやりと笑った。
きみを見つめたまま、木下さんは時間を止めてしまったみたいに、しばらく固まっていた。
それから静かな吐息をついて、そうねと頷いた。ノートを閉じてきみに差し出すと、サンタ来るといいわね、と疲れたような笑みを浮かべた。お母さんはにこにこときみの頭を撫で続けている。
いつの間にか外はすっかり暗くなっていて、木下さんの大きな影は、闇に溶けてしまってもう見えない。
書き取りを終えると、きみは電気を消してベッドにもぐりこむ。毛布を掴んで頭までですっぽりとかぶり、くるんと身体を丸めて小さくなる。
毛布の中は、きみの世界だ。その小さな小さな世界のなかでは、きみと影は重なり合って、一つになっている。きみは影で、影はきみ。きみはこの小さな世界が、とても落ち着く。
きみは暗闇の奥を覗き込んでいる。布団に耳を押し当てていると、階下からいろんな音が聞こえてくる。叫び声。怒鳴り声。食器が割れる音。人喰い鬼も笑いザカナもいない。ここはきみの小さな世界。
階段を上ってくる音が聞こえて、きみはまぶたを閉じる。とん、たん、とん、たん。一歩ずつ。
部屋のドアが、きぃ、と音を立てた。開いたドアから灯りが入り込むのと一緒に、男の人の影が、長くて細い針のようになって部屋に忍びこむ。
男の人の影は何も言わない。肩で息をしている。手には野球のバットを握りしめている。
階下からはお母さんの泣き声が聞こえている。
代わろうか？

「――大丈夫」
きみはちょっと困ったように笑う。
男の人が部屋に踏み込む。喉の奥から獣みたいな低い唸り声をたてる。
部屋のドアがぱたんと静かに閉じられた。
それで影たちはみんな消えてしまって、真っ暗闇の部屋のなか、もうきみの姿は見えない。

＊

きみは膝を抱えている。
公園のトイレの便座の上で、小さく、丸くなって。
磨りガラスから朝の光が射し込んで、トイレの床とドアの上に影を描き出す。
おはよう。
「……」

きみはしっかりと両脚を抱え込んだまま、ちょっと焦点の合わない瞳でドアを見つめている。髪はぼさぼさに乱れて、右のまぶたがふっくらと青紫色に腫れ上がっている。口の端と鼻の穴の奥が赤く染まっている。
やっぱり、ここでサンタを待つの？
「……」
そろそろ手紙を仕上げて出さないといけないね。燃やす家も、決めなくちゃだよね。
さあ、どうしたの？
街へ行こうよ。
「……」
きみは素早く靴に足を滑り込ませると、勢い良くドアを開けて外に出た。
朝陽の下に立つと、じっと影を見下ろした。それから足を振り上げて、
だん、だん、だだん。
いたい、いたいよ！
きみは勢い良く足を振り上げて、影を踏む。地面の上で、地団太を踏むように飛び跳ね

て、何度も何度も、ぼろぼろの靴で踏み付ける。だん、だん、だだん。
いたいよ！　やめてよ！
踏み付けるきみの顔は歪んでる。折れそうなくらいに歯を噛み締めて、目は血走って真っ赤になってる。
足を壊しそうなくらい勢いをつけて蹴りつける。だん、だん、だだん。捲れあがったシャツの隙間から、お腹の赤黒い痣が顔を覗かせる。だん、だん、だだん。
いたいよ！　やめてよ！
いたいよ！　ぼくなにも悪いことしてないよ！
やめてよ！　助けて！　ごめんなさい！　すみません！　ごめんなさい！
「……ごめん」
何度も踏みつけたあと、きみは足を止めて地面を見下ろす。
真似っこ遊びをしてるだけなのに、きみが何故謝るのかわからない。謝るきみの顔はいまにも泣き出してしまいそうで、ちょっと困ってしまう。
「いいよ。好きなとこ、行っても」

いつものようにからかうでもなく、きみは言う。
「行けよ、一人旅。行っていいから。おれ、大丈夫だから」
ひどい。
どうしてそんなこと言うんだ。
わかってるくせに。
一人旅なんて、どうせできないんだ。こんな意地悪なきみの下から抜け出して、広い世界を見てまわりたい。でもできないんだ。北の方に行って、一日中暗くならない土地に行って、夜になっても沈まない太陽の下で、他の奴らと気ままに語り合ったり、トランプしたり、キャンディ舐めたりして暮らしたい。でもできないんだ。
きみを放っておけない。
きみをひとりぼっちで残していけない。
ぼくはきみの影なんだから。

きみはまた街を彷徨いはじめる。
灯りの漏れる家々の窓の向こうを、お気に入りの絵本を開くように覗き込んではそっと閉じ、背中を向けて遠ざかる。
十二月の冷たい風が吹きつける中を、きみは歩く。お母さんはあれからもうやってこない。財布の中のお札はお母さんに取り上げられてしまったので、小銭を切り詰めて使っている。
女の子は近頃、窓から出てこなくなった。閉め切られた窓の向こうから、女の子と男の人と女の人の、楽しそうな声が聞こえてくるばかりだ。きみは窓の前にぽつんと立って、それを聞いている。
女の子のママとパパ、仲良くなったみたいだね。もうサンタが願いごとを叶えてくれたのかな？　でも、どうして女の子がサンタに出した手紙のことを、パパが知っているんだろう？　これは本当に女の子たちの笑い声なの？　それとも、ここにも笑いザカナが棲みついてしまったの？
きみは答えない。

窓の下で寒そうに膝を抱えたまま、女の子が窓を開けてくれるのをいつまでも待っている。
昨日、きみは郵便局に行った。受け取ってもらえない郵便物が、どうやって処分されるのか尋ねるためだ。受付のおじいさんは親切な人で、勉強偉いねときみの頭を撫でると、焼却炉で燃やしてしまうんだよとにっこり笑った。
それからきみは、ようやく書き上げた手紙を、お手製の白い封筒に入れた。最後の硬貨を取り出し切手を買うと、慎重に表に貼りつけた。
『サンタさんへ』とでっかく記すと、郵便局のポストに投函した。

さあ、いよいよだね。
明日はクリスマスイブだ。
やるだけのことはやったね。あとはサンタを待つだけだ。
きみの字、サンタさん読めるといいね。きみの文章、サンタさん気に入ってくれるとい

いね。
あとは明かりを灯すだけだよ。燃やす家はもう決めた？　きみの家？　人喰い鬼の家？
それとも、あの女の子の家？
ねえ、そろそろ教えてくれてもいいだろ。
きみは、サンタクロースに何を願うの？

4

クリスマスイブの夜は雪が降った。
白い雪がひらひらと、並んだ屋根やビルたちをすっぽりと覆い隠していく。丘の上から見下ろす街は、雪化粧のなかでぴかぴかぴかぴかぴか。
きみは、サンタを待っている。

公園のトイレの便座の上で、膝を抱えて、丸まったまま。きみの願いを叶えてくれる赤い服の太ったおじいさんを、いまかいまかと待ち受けている。
外はもうすっかり陽が暮れた。お手洗いの入り口にはランタンが提げられ、小さな炎をゆらゆらと揺らして、きみのいる場所の目印になっている。
街には行かないの？
「……」
火はつけないの？
やっぱりランタンだけじゃ、みつけにくいんじゃないかなあ。
「……」
きみは返事をしない。虚ろな目で宙を見据えている。
冷たい風が衝立の隙間から忍び込んできて、きみは身を竦める。うつむいていた顔を上げると、トイレのドアを開けた。手洗いの蛇口に口をつけ水を飲んだ。昨日からきみは、ご飯を食べてない。
きみは何度目か、お手洗いの入口に掲げられたランタンを確認する。ちろちろと硝子の

中で揺らめく火を見て、それからぼんやりと空を見上げる。真っ暗闇の中、どこから生まれるのか、次々に降りてくる雪がきみの鼻の上に乗る。

きみは街へ降りることにする。

ランタンを左手に提げて、カーディガンに括りつけられた二つの荷札をゆらゆらと揺らしながら、世界に一つしかない灯火を捧げ持つ小さな聖者のように、真っ暗闇の道を下りていく。

街は光と音楽と笑い声であふれていた。

あちこちの店先から、陽気なジングルベルのＢＧＭが流れる。鈴の音が鳴る。ぴかぴかぴかぴかイルミネーションが踊る。七面鳥の焼ける香ばしい匂い。甘いクッキーの匂い。通りの両脇に並んだ家々の、ぴったりと閉め切った窓という窓から、きみが通りがかるたびに聞こえる幸せそうな笑い声は、ママ。パパ。ママ。パパ。愛してるよ。愛してるよ。愛してるよ。

きみはうつむいて、じっと地面を見下ろしている。見下ろされ、影は地面の奥の方から、じっときみを見上げている。

ねえ、はやく。

燃やしてしまおうよ。

「……」

呼びかけても、きみは応えてくれない。

ねえ。もういいだろ。

わかってるだろ。

きみは窓の向こうには入れないんだ。

こんな世界、覗き込むのなんてバカげてる。きみは広い世界なんか行けないんだ。他の奴らと気ままに語り合ったり、トランプしたり、キャンディ舐めたりして暮らすことなんて、できないんだ。

サンタ、来ないよ。どうせ、窓の向こうに住んでる子にしか、来ない奴なんだ。きみのところになんか来るもんか。

女の子も、もう窓を開けてくれないよ。ママとパパが仲良くなったから、もうきみのことなんて忘れてしまったよ。

もういいよ。こんなの、どうだっていいじゃない。燃やしてしまおうよ。明るくなるよ。暖かくなるよ。炎で一面明々と照らして、みんなでダンスパーティをしようよ。

きみはポッケから、マッチ箱を取り出す。かじかんだ手にのった小箱を、じっと見つめる。明るさと暖かさを灯す小さな箱。見つめるきみの髪に、肩に、雪がひらひら舞い下りていく。

きみは、女の子の家の門をくぐる。右手にマッチの小箱をぎゅっと握りしめ、表情もなく歩いていく。

灯りの漏れた窓のそばに歩み寄ったきみは、怒鳴り声を聞いて身を竦めた。

息をひそめて硝子に身を寄せ、窓の向こうを覗き込む。

また怒鳴り声がした。お父さんの怒りの声だ。続いて金切り声がした。お母さんの涙まじりの声だ。

窓の向こうの女の子の背中は、呆然と立ち尽くしたまま動かない。

なんだ。お願いごと、まだ叶ってなかったんだ。クリスマスイブ、今日だものね。

食器の割れる音がする。お母さんの悲鳴がする。何かを打ちつける音。叩く音。きみの聞き慣れた、馴染み深い音。

きみは身を乗り出して、窓の向こうを覗き込む。息をつめて、ぎゅっと拳を握りしめて、額を硝子に押し付けて、一心に。

女の子の泣き声がした。

きみは、はっと息を呑む。弾かれるように窓から身を離した。窓の向こうに映り込んだものを、目を見開いて覗き込みながら。

何が見えるの？

きみは走り出す。背中を向けると、一目散に。きみは逃げる。逃げる逃げる。右手でマッチ箱を握りしめて、左手で目元を乱暴にこすりつけながら。逃げるきみに、影はついていく。おいてかないで。おいてかないでよ。

きみは凍りついた雪に足を滑らせて転んだ。影も一緒に転んでしまって、二人で雪の上に横になる。

ランタンの火が消えてしまって、月明かりが雪面を照らすだけ。明かりが足りないので影はこのとおりぼんやりしてしまって、ちょっと眠くなる。ふわあ。

きみも、同じみたい。
雪の上に横になったまま、きみはとろんとまぶたを下ろしかけている。横たわったきみの身体を、ひらひらひらひら、雪が舞い降りて隠そうとしてる。
眠いの？
きみはちょっと迷ってから、頷いた。
じゃあ、眠ろうか。
おやすみ。
「……おやすみ」
きみがまぶたを閉じようとしたとき、頭の上の方から鈴の音が聞こえてきた。
きみは空を見上げる。
暗闇に白くぼけた空に、雪が好き勝手に渦を巻いている。その中を、ぐるりと螺旋を描きながら、ゆっくりと下りてくるのは八匹のトナカイ。
トナカイはソリをひいていた。ソリの上には、真っ赤な服を来た大柄な人影。大きな白い布袋を抱えている。

サンタさんだ。
サンタさんがきみのところに、プレゼントを届けに来てくれたよ。
着陸したソリから下りたサンタさんは、噂どおり、もじゃもじゃの髭をたくわえたおじいさんだった。
立ち上がったきみのそばへやってくると、顔を確認するようにきみを見下ろした。
真っ赤な服の懐に手を突っ込んで、四つ折りになった紙切れを取り出した。白い手袋を嵌めた手で丁寧に広げると、きみへ示した。
「きみの手紙だね？」
きみは頷いた。
紙切れには見慣れたきみの字が並んでいる。
きみは姿勢を正してサンタさんを見上げると、じっとその目を覗き込んだ。
「プレゼント、もらえますか？」
「欲しいものは、本当にこれ？」
きみは頷いた。

サンタさんはしばらく、皺だらけの顔の中の小さな瞳で、じっときみを見下ろしていた。
それから、残念そうに呟いた。
「……これは、プレゼントできないよ」
「――なんで！」
きみは目を見開いて、ぶるぶる首を振った。
「どうしてだよ！」
サンタさんは答えない。じっときみの目を見つめたまま、黙り込んでいる。
きみはサンタさんの服の裾にしがみついて、必死に声を張り上げる。
「なんでも欲しいもの、くれるって言ったのに！」
顔を歪めてサンタさんのおなかをぽしぽしと叩く。悔しそうに、何度も何度も。
ねえ、きみ、何を頼んだの？
凄腕サンタでも用意できないような、どんなすごいもの欲しかったの？
きみの頭を撫でてくれる、優しくて暖かいお母さん？
きみの身体を抱き上げてくれる、強くて頼もしいお父さん？

それともきみと一緒に遊んで、気持ちを分かち合ってくれる友達？
「……？　なんだ？　それ。そんなのいらないよ」
きみは不思議そうに首を傾げて、よくわからないというように首を振った。
「それよりサンタ」
きみはサンタさんを見上げると、身体の脇で拳を握りしめた。
何度も反芻してきた祈りを、声を張り上げて告げた。
「おれ、強い心がほしい」
きみは左胸に手をあてて言った。
「あの子のママとパパが仲良くなるのを、心から祈ってあげられるくらい強い心がほしい。そうしておれのことを忘れちゃっても、寂しくならないくらい強い心がほしい。窓の向こうの優しい人たちに、感謝していられるくらい強い心がほしい。みんなの、この世界みんなの幸せを祈れるくらいの、強い心がほしいんだ」
きみはサンタさんを見上げて声を張り上げる。
「そうすればおれは大丈夫なんだ。どんなことがあったって平気なんだ。明日も明後日も

ずっとずっとずっと、胸を張って生きてられるんだ。だから、なあサンタ、おれにクリスマスプレゼントをくれ。強い心をくれよ！」

すがりつくきみを、サンタさんはじっと見下ろしていた。

それから、ゆっくりと首を振って、それはできないんだと言った。

それは、きみが自分で自分の靴下の中に、詰め込んでいくしかないものなんだ。

きみはぶるぶると首を振る。なにか言葉を発しかけては呑み込み、くしゃくしゃに顔を歪めると、くるりとサンタに背を向ける。

きみは駆け出す。風のように。サンタさんとトナカイたちはその場に立ったまま、走っていくきみの背中にメリークリスマスと言った。きみの目からは、ぽろぽろぽろぽろ。零れて散って、消えていく。

残念。

クリスマスプレゼント、もらえなかったね。

きみ、すごいもの願ってたんだね。さすが、きみは野心家だ。

強い心、か。

どうすれば手に入るのかなあ。

いつか、手に入れられるといいね。

走っていると、誰かにぶつかって、きみはぺたんと尻もちをついた。涙でくしゃくしゃになった顔で見上げるきみに、手を差し出したのはあの放火魔だ。

差し出された放火魔の手には、紫色の細長い紙縒りが一本、乗せられている。きみは紙縒りを受け取ると、何度も目元の涙を乱暴にこすりながら、マッチを取り出し、火をつけた。

細い紙縒りの先端に灯った小さな炎が、ぱちぱちと火花を散らしはじめる。

放火魔がくれた線香花火の散らす火花を、きみはじっと見つめていた。

雪の降りしきる夜に咲く、季節外れの小さな花火は、細い光を懸命に散らして、とてもとても綺麗だった。

＊

きみは今、夜の中にいる。

眠りについた暗い闇の帳の中を、雪を踏みしめながら歩いている。

両脇に並んだ窓の向こうでは、みんなが暖かな毛布にくるまって寝息を立てている。その間を、きみは歩く。白い息を弾ませて。肩に担いだ荷袋の端を、かじかんだ手で抱えこみながら。

袋の中には、処分待ちだった郵便物が詰め込まれている。郵便局から持ってきてしまったものだ。きみは宛先のわからない荷物を抱えた、宛て先のわからないサンタクロースだ。窓から窓へ渡り歩いては、窓柵にプレゼントを置いてゆくんだ。明日の朝、窓を開けてみつけた人たちが、気に入ってくれるかはわからないけれど。

夢はなにかって？

いつか一人旅をすることだよ。別に、きみとの生活にそれほど不満があるわけじゃないけれど、やっぱりいずれは自分の足で、世界を歩き回ってみたいと思ってる。そうだな。特に、北の方に行ってみたいと思ってる。サンタの故郷の寒い土地へ行って、空飛ぶトナカイを見つけるんだ。

きみは女の子の窓のもとへ行くと、中を覗き込む。

何が見えるの？

「秘密」

きみはにししと笑って答えると、袋をごそごそ探り、珊の上に小さなくまのぬいぐるみを乗せた。背を向けて、また次の家へと向かう。

雪の振るなかを、きみは何処までも歩いていく。

これから先も、たぶん、ずっと。

仕方ない。

一人旅は当分先のことにして、しばらくはきみの後ろをついていこう。きみがうつむいたとき、ふりむいたときに、いつでもそばにいてあげられるように。きみが哀しくならないように。

きみは歩く。一歩、一歩。

足を上げて、下ろして。

きみはかげをふむ。